

# 筒江薫編『民俗学者・野本寛一 まなびの旅』

辻 貴 志

本書は、環境民俗学の大家である野本寛一氏（以下、野本）が自身の研究人生について語る評伝的記録であり、野本から近畿大学大学院文芸学研究科で直接薫陶を受けた地方史家の筒江薫氏により編纂されたものである。野本は絶えず山・川・海のフィールドワークを行うことで、生態環境と日本人との関係を明らかにし、膨大な民俗誌を生産してきた功績によって、二〇一五年の文化功労者に選出された。本書には「野本民俗学」の真髄を示すだけではなく、野本の生い立ちや人となりも併せて紹介することで、野本の学問の価値と個性の豊かさを我々の生き方に役立たせようとする試みがある。本書は「はじめに」と「おわりに」を除く七章から構成され、付録としてフィールドワークのおみやげ「書斎ミュージアム」と野本の主要な「著作紹介」が付記されている。野本がフィールドワークで収集した民具四点とその解説が付されているが、本書評では本書の核となる第一章から第七章のみを対象とする。

第一章「最初の旅」では、野本の民俗学の基礎が「峠」の歩きから始まり醸成されていった経緯を辿る。野本は峠を越えることで変わる文化景観に興味を抱き、とりわけ焼畑の生業・生計システムに魅せられて「焼畑民俗文化論」を展開した。そして、個人に密着した調査を行うことで得られた情報から人の生業の戦略構造を分析し、自然の摂理が個人の行動様式と密接に結びついている点に感銘を受けた結果、野本は「生態民俗学」や「環境民俗学」という独自のフレームワークを構築していった。

第二章「五人のおばあちゃん」では、野本の民俗学的素養がおばあちゃんや

おかあさんから受け継がれ、培われていった点を紹介する。まず、野本はおばあちゃんやおかあさんが関わる年中行事や話す方言をよく理解し、吸収した事実を彼自身の記憶や記録から確認する。そして、民俗学で肝要なのは、老人の若い世代への伝承力であると説き、とりわけ孫の世話に従事するおばあちゃんの魅力が高く評価している点を紹介し、野本とおばあちゃんの関係性が、野本の民俗学の原点になっていることを確認する。現代日本社会では家族関係の変化により、おばあちゃんと孫との関係性は希薄化したことが、野本はおばあちゃんが有する力の再評価を期待していることを記す。

第三章「子どものころ」では、野本の子どもの時代を回顧する。戦中の校内での年齢階梯制度を始め、戦争の雰囲気や馴染めず小学校の時から読書に没頭していったことが語られる。その中で特に魅了されたのが柳田國男の本で、子どもの頃は日本の伝統や日本人の伝承知に並々ならぬ関心を抱き、自らの生態民俗論につながる欲求を涵養していった。一九歳の時には、自らの要領の良さを親族などにたしなめられたことをきっかけに、誠実さを持つて人に接する制約を自身に課した。一方で、それ以来、そうした儒教的な生きづらい思想に対して、老荘思想的な気楽に生きるという感覚を併せ持った人生を歩んだ。

第四章「高校教員・野本寛一」では、野本の高校教員時代に触れるが、教員と民俗学者の二足のわらじを履くことの困難さについて吐露している。教育や教務に追われ、野本が民俗学者の道を歩き出すのには、教員になってから一二年ほどを要した。教員の忙しさがまざまざと伝えられる一方で、野本は家庭訪

間にも膨大な時間を割くが、家庭を訪問することで生徒だけでなく生徒の親族との関係を良好に構築し、生徒の祖父母から民俗的情報の収集を行った。こうした態度は実際の民俗学の調査に大いに役立ったが、公務の多忙から基本的な民俗学調査は土日しかできず、この時点では日本民俗学会年会に出ることがかなわなかった。後に大病を患い、その際に出世作となる『生態民俗学序説』の構想を練ったが、野本の民俗学調査は順風ではなかった。しかし、高校教員として、さらに夫や父親として制約された環境下でも、野本はわがままに歩き回った。そこには幼児の時代に戦争で父親を失った父親像の欠如が影響していたとする。

第五章「フィールドワークは民俗学の原点」では、フィールドワークの野本流の楽しみ方を紹介する。野本によると、フィールドワークの醍醐味は、自ら歩くことで得た知見を一次資料として、自らが立てた仮説を検証していくことができるリアリティーにある。その副産物として、環境や人やモノとの出会いがある。これはインターネットの普及した現在でも変わらず、考え、実際に歩かなければわからないとする。野本の環境民俗学は、事実の積み重ねと体系化にあり、無味乾燥的な自然科学とは一線を画する性質を有し、観念では解決できない徹底した現場主義があることを記す。

第六章「展開するフィールド」では、野本のフィールドワークの徹底した現場主義を突き詰める。川、海、山、島の自然と民俗との関係を説明するには、自然環境の連続性を具体的にすることで多くの地域を歩き学ぶ必要がある。そして、自然と民俗との関係にとどまらず、人を対象とした生きた民俗を扱う場合の調査マナーの必要性に触れる。例えば、調査地を訪問する際のタイミン

グ、地元民への心的配慮などについて、外来者が土足で踏み込むことは絶対に許されず、常に謙虚さが求められるとし、謙虚であれば誰でも受け入れられると人間関係の本質を説く。また、何かを知るためには根気が必要であると、これまでの調査研究のスタイルを振り返る。

第七章「時間はとめられない」では、民俗学を学ぶ者の宿命としてインフォーマントとの別れを読者に伝える。インフォーマントを再訪しても物故しているケースが少なくない。物故した人との付き合い方の可能性を野本は模索するが、これは民俗学者にとって時間が止められないことを表す象徴的な課題である。また、フィールドワークで経験した貨物船、吹雪、台風、野宿、酒に関する失敗や人心の温かみの思い出を振り返る。貨物船で船酔いしたが同乗者から有益な話が聞けたり、台風のためヘリコプターをチャーターしたり、駅のベンチで一夜を過ごしたり、酒を通じて人々と打ち解け話を聞かしてもらったり、フィールドワークに関わる者が遭遇しうる良し悪しはあるがフィールドの洗礼とその対応という重要な体験談でもって本書における野本の話は締めくくられる。

以上、本書は旺盛なフィールドワークを展開し、膨大な実績を積み上げてきた現代を生きる民俗学者の中でも指折りの民俗学者、野本の調査研究と生い立ちをコンパクトに編集した書籍である。野本を語り尽くすにはいささか物足りないボリュームだが、本書を読むことで、野本の民俗学者としての顔、人物像、抱いている思想をおおよそ垣間見ることができる。また、膨大な業績をその足で稼いできた野本の調査スタイルや理念についても本書は容易に紹介している。

評者は日本民俗学のフィールドワークは、人間関係や相手側の都合が大きく影響する非常に難しい調査手法であると感じている。これは日本でのフィールドワークにおいて人々とうまく関係を築くことができなかった評者自身の失敗に端を発するが、実体験があるからこそ日本各地を頻繁かつ長年にかけて歩き

回り、フィールドの人々との関係を構築する調査を是とする野本の相当な技術と覚悟がわかる。野本は子ども時代に身に付けた「謙虚さ」を武器とし、これまで調査を展開してきたとされるが、常に謙虚でいることは並大抵のことではない。野本はまた何度も同じ人々を訪ねて調査を行ったが、評者も大学院時代の指導教員から「自分が尊敬できる人を調査対象にしなさい」と説かれたことが複数回あり、野本が徹底して自身が尊敬できる人々を調査対象としていた可能性が高い。一方で、野本はどのような場所でも淡々と調査をできたわけではなく、本書でも告白されるように「いくつになっても心臓は強くならないね。緊張感がある」と彼のフィールドワークがやはり生涯謙虚さに根ざしていたことは明白である。本書は、簡略ながらフィールドワークでは許されないマナーについても触れており、フィールドワークを行う者は野本の流儀に学ぶべき点が多々ある。これは「天性の素質」などという言葉では片付けられないフィールドワーク全般に求められる姿勢である。

野本は高校教員の傍、民俗学調査を行ってきた経緯があり、研究機関に勤める民俗学者としては遅咲きである。また、高校の教務の都合上、学会にも出ることができなかった。しかし、野本は休日を利用してコッコツと調査を行うとともに、生徒の家庭訪問の機会を利用して生徒の祖父母から民俗学的情報を集める以前、それも幼少の頃から民俗学に関心を抱き、民俗学に生涯をかけた人生を送ってきたと解せる。そして、その功績により文化功労者となったが、一般に野本を知る人は多くはないと思われる。評者は近畿大学経営学部で非常勤講師を務めるが、野本について少しでも知る学生はこれまで誰一人としていなかった。日本民俗学では、柳田國男、南方熊楠、折口信夫、宮本常一が有名で、谷川健一や宮田登も民俗学を一般に普及させてきた功労者である。彼らと比較して、野本は地味な印象があるが、研究業績とそれに比例した歩く量にお

いては、他の民俗学者に引けを取らない。地味な印象が拭えない理由は説明しにくいだが、本書の中で野本自身も「民俗学という素朴な学問を鈍重につづけている地味な学徒だ」と触れていることから評者の評価自体は的外れではないだろう。

それゆえに本書が野本という民俗学者を一般向けに紹介することになった運びは大いに評価できる。特に、自然と民俗との関係を扱った環境民俗学が、評者を始め生態人類学という自然と人との関係性を探求する学問に従事する者にとって極めて重要である上に、野本民俗学が評価されれば、今後の自然と民俗と人との関係に関する研究をより高い次元へと導くと期待される。

しかし、残念ながら本書だけでは野本の学問体系とその詳細を伝えることができていない。各章で断片的に野本の調査の記録が織り込まれているが、例えば、野本の「生態民俗学」の学術的意義は何なのか、どのようなことが具体的な研究対象として描き出されてきたのかなどについて明らかにされていない。本書に野本の学術面のエッセンスや理論を体系化した章を設けると、野本民俗学の深みに読者を誘うことができたのではなからうか、この点いささか残念である。評者が最も野本の業績について評価している『生態と民俗―ヒトと動物の相渉譜』（二〇〇八年、講談社学術文庫）は、日本各地の自然を利用する人々の民俗や動植物に関する民俗伝承および知恵を詳細にわたって記録しており、日本人のこれまで培ってきた動植物との共生・共存・葛藤・対立という構図を相渉という概念で捉えた野本民俗学の傑作である。このような研究面にもある程度のページを割かないと、野本民俗学の価値を適切に評価される機会を損ねてしまう。野本のもっとで学んだ編者にこそ取り組んで欲しかった重要な課題である。しかし、本書は研究者だけでなく、一般向けにも書かれており、野本民俗学の導入の役割も担っている。野本の代表的な著作は一―三行程度の

説明に過ぎないが「著作紹介」の項で示されており、野本民俗学を基礎から学ぼうと本書に目を通しておく意義はある。

今日、自然と民俗との関係性は近代化、原発事故や津波・地震による自然災害、自然開発などの要因により急速に薄れつつあるように思われる。また、野本が記述してきた民俗知を有する人々の死による知の消滅と継承の困難も要因であろう。さらに、若い世代を中心に、何でもインターネットの情報に頼ろうとする風潮が強く確認できる。民俗学を始め、自分の足で歩き、考えるフィールドワークという学問体系は死に体であるのかもしれない。しかし、くまなく世を歩くことで野本民俗学は構築されてきた。野本民俗学は歩き考えるフィールドワークの基本と根拠、そして他者への誠実さを支えに展開してきたことを本書は伝えている。いずれも基本的な他者との付き合い方の方法であるが、こうした方法や他者との関係性に関する英知の欠如が、今日の排他主義や国際関係など狭い視野に陥りがちの問題を助長させているとも考えられる。マスメディアが恣意的に流す情報だけでなく、アルゴリズムバイアスなどインターネット上の情報に信頼性が欠けつつある昨今、我々はこうした情報に惑わされずかつ扇動されないよう十分に気をつける必要が生じている。こうした諸問題に対して、日本人の伝承や心意を主な研究対象とし、日本人あるいは人間としての根源にたどり着くことで自然や他者への配慮を認識し実践する野本民俗学は、今日の偏狭な社会や世界を生きる上で一貫性を持って大らかに生きるための指針を我々に提供しており、その思想について学ぶ価値は高い。

野本民俗学の手法は至ってシンプルであり、自然と民俗の関係性だけでなく、社会問題や人間関係にも幅広く応用可能な学問である。本書は野本民俗学を世に広めるだけでなく、それによって世の中の閉塞感をより良い向きに軌道修正していこうと意図した書と念頭に置いて読むことで、野本民俗学とそれに

根ざしたフィールドワークの今日での有用性と意義がより多くの読者に伝わりと確信する。また、日本民俗学の存在意義にも一石を投じる可能性がある。特に、野を歩き考える学問を時代錯誤であると考えている人たちにこそ、ぜひ手にとって読んでもらいたい一冊である。

(東京、玉川大学出版部、二〇一九年、149頁、2200円＋税、ISBN978-4-472-30306-7)